



歴博映像フォーラム15

映画と アイヌ文化

ニール・ゴードン・マンロー撮影フィルム(部分) 国立歴史民俗博物館蔵



撮影:立石 信一

2021年

5月15日土

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

歴博映像フォーラム 15

映画とアイヌ文化

日 時： 2021年5月15日(土) 12:50～16:30

会 場： 国立歴史民俗博物館 講堂

主 催： 国立歴史民俗博物館

プログラム

12:50	開会の挨拶 西谷 大(国立歴史民俗博物館・館長)
12:55	趣旨説明 内田 順子(国立歴史民俗博物館・教授)
13:00	「アイヌ民族を撮影した人類学映画の歴史— 1925年撮影、八田三郎『白老コタン アイヌの生活』を中心に」 岡田 一男(株式会社東京シネマ新社・代表取締役)
14:00	「映画制作の主体とは—旧アイヌ民族博物館の記録映像制作をとおして」 内田 順子(国立歴史民俗博物館・教授)
14:45	休憩
14:55	「アイヌ民族博物館から民族共生象徴空間へ —地域の記憶の映像化に向けて—」 立石 信一(国立アイヌ民族博物館・学芸主査)
15:55	コメント1 野本 正博(公益財団法人アイヌ民族文化財団・文化振興部長)
16:10	コメント2 春日 聰(多摩美術大学・非常勤講師、 国立歴史民俗博物館・客員准教授)

総合司会 川村 清志(国立歴史民俗博物館・准教授)

歴博映像フォーラム 15

「映画とアイヌ文化」開催にあたって

内田 順子（国立歴史民俗博物館）

近年、アイヌ文化への関心が、一段と高まっている。その背景には、アイヌ民族の登場人物が活躍するマンガの大ヒットや、民族共生象徴空間（以下、ウポポイ）の開業などがあると考えられる。いわゆる「アイヌ文化」の記録ではなく、現代を生きるアイヌ民族の多様なありかたに寄り添うドキュメンタリー映画も増加しており、アイヌ民族とその文化の表象の様態が、あらたな段階を迎えており、ということができる状況ではないだろうか。

こうした状況を踏まえ、本フォーラムでは、ウポポイがオープンした白老で記録されたアイヌ文化を対象とする映像を中心取り上げ、地域の記憶・文化資源・表象という観点から、映画という技術と制度が孕む可視化/不可視化の問題や、オーセンティシティ（真正性、本物らしさ）/インテグリティ（完全であること）の問題について考えていきたい。何を撮影し（でき）、何を撮影しない（できない）のか、そして、何を伝えるためにどのように編集するのか。また、何をもって「アイヌ文化」として映像化し、その内容を、誰がどのように決定しているのか。ここには、映画の技術的問題だけでなく、撮影対象を取り巻く「社会」の考えが、意識的・無意識的に関わってくる。

本フォーラムでは、はじめに、岡田一男氏にご講演いただく。岡田氏は、アイヌ民族をはじめ、北方の諸民族に関わる記録映画・学術映画の収集・活用に長年取り組まれてきた。アイヌ民族が、歴史的な人類学映画の中でどのように描かれてきたのか、具体的な映像に基づき、歴史的映画の問題点だけでなく、今後の活用の可能性についてもお話をいただく。

第2の講演では、ウポポイができる以前に、白老におけるアイヌ文化の伝承活動を中心に担っていた一般財団法人アイヌ民族博物館（以下、アイヌ民族博物館。2018年3月閉館）において、2010年度に内田が制作担当として記録した映像（歴博研究映像『アイヌ文化の伝承 白老 2010』）を取り上げ、表象の「主体」をキーワードとして、博物館活動や映像制作における「協働」の重要性について述べる。

第3の講演では、立石信一氏にご登壇いただく。立石氏は、2018年3月31日に閉館したアイヌ民族博物館の職員として、また現在は、国立アイヌ民族博物館の職員として勤務され、アイヌ民族博物館が閉館する最後の1日を中心に記録した映像のほか、ウポポイへと環境が変化する中で、白老という土地の「記憶」に対する思いに焦点を当てた新作の映像も制作された。これらの映像の上映に基づき、博物館職員が同僚と協働し、ともに制作主体として映像を作ることの可能性について、とくに、「地域の記憶」をキーワードとしてお話をいただく。

以上の3つの講演に続いて、野本正博氏と春日聰氏からコメントをいただく。

野本氏は、アイヌ民族博物館の元館長であり、現在は公益財団法人アイヌ民族文化財団・文化振興部長としてウポポイの運営に携わっている。アイヌ民族が主体的に自らの文化資源を活用することの重要性について、議論を深めるコメントをいただけるものと思う。

春日氏は、映像や音響による民族誌研究を専門とする研究者で、現在、歴博が推進する歴博研究映像についての共同研究の代表でもある。さまざまな様態での映像・音響の研究・制作に従事してこられた立場から、映像が孕む問題点や可能性についての議論を豊かにしていただけると考えている。

年表 アイヌ民族の近現代と映画

年	国・北海道	白老	アイヌ民族・アイヌ文化に関わるおもな記録映画
1869年	開拓使設置。8月、蝦夷地を改め、北海道とする		
1871年	戸籍法公布、アイヌを平民に編入。アイヌの習俗を禁止		
1878年	開拓使、アイヌの呼称を「旧土人」に統一		
1881年		明治天皇、北海道開拓事業視察のため来道。白老に一泊してアイヌの風俗・文化を観察	
1892年		白老駅、開設により、白老を訪問する旅行客増加	
1897年	北海道国有未開地処分法公布。和人による土地取得と移民数の増加		リュミエール社が派遣した撮影技師コンスタン・ジレル、アイヌの舞踊を記録
1899年	北海道旧土人保護法公布		
1911年		大正天皇(皇太子の時)来道の際、侍従に第二小学校を視察させる	
1912年		大正初期、学術研究者・旅行視察団・皇族等の来訪が続く。アイヌ民族による説明や工芸品の販売などが行われた	東京上野で拓殖博覧会開催。観光館で樺太アイヌの生活の様子が上映された フレデリック・スター、この頃、平取で撮影か 『日本のアイヌ(日本の滅び行く民族、アイヌ)』米国シリグ・ポリスコープ社
1913年			ニール・ゴードン・マンロー、釧路市春採でクマ祭等を写真撮影
1915年			ニール・ゴードン・マンロー、白老でアイヌの生活文化を調査。撮影は不明
1916年			ベンジャミン・ブロツキー、日本国有鉄道や日本交通公社の協力により、日本各地を巡回し『Beautiful Japan』を撮影。白老アイヌの映像あり
1917-18年			八田三郎、『白老コタン アイヌの生活』を監督
1925年			ニール・ゴードン・マンロー、熊送り儀礼を二風谷で撮影。1935年頃まで、そのほかの儀礼等も撮影
1930年			
1946年	社団法人北海道アイヌ協会設立 北海道観光連盟設立		
1947年		この頃から白老への観光客が増加。小規模な営業方式でアイヌ文化を紹介	
1949年	日本国有鉄道発足		
1951年	日本航空株式会社が国内線運行を開始		
1952年			『アイヌの古式舞踊』インターナショナル映画
1953年			『アイヌの川漁』岩波映画製作所
1961年	北海道アイヌ協会が北海道ウタリ協会に名称変更		『静内アイヌの葬法』日高文化研究所(1960年代製作)
1962年		観光客急増	『アイヌ舞踊』釧路地方教育局
1965年		白老市街地にあった「白老アイヌコタン」をポロト湖畔に移設。白老観光コンサルタント株式会社による観光施設としての「ポロトコタン」の運営開始。自営で観光業を営むアイヌ民族を町が主導するポロトコタンに吸収	『イヨマンデー秘境と叙情の大地で』東京オリンピア映画社 『アイヌのまるきぶね』松岡プロダクション
1966年			『円空とアイヌ』日経映画社
1967年		白老民俗資料館開館	『イナウ』日経映画社

年	国・北海道	白老	アイヌ民族・アイヌ文化に関わるおもな記録映画
1968年	北海道開拓100年を記念して、野幌森林公園が道立自然公園に指定されたほか、北海道開拓記念館（1971年開館、現北海道博物館）と北海道百年記念塔（1970年設置）が建てられた		『アイヌの装い』日経映画社
1969年			『シンヌラッパ』日経映画社
1970年	全道市長会、「北海道旧土人保護法」廃止を決議 北海道ウタリ協会、同法廃止に反対決議 国鉄「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン開始	「白老民族芸能保存会」を組織、大阪万博に出演	
1971年			『アイヌの結婚式』グループ現代
1972年	札幌オリンピック開催	オリンピック行事「北国の芸能」に出演	
1974年		町営のアイヌ観光への批判が高まる	『チセ・ア・カラ（われら いえを つくる）』グループ現代
1975年		白老民芸会館オープン。ポロトへの観光客60万人をこえる	
1976年		地元のアイヌ民族を中心とした新しい財団「財団法人白老民族文化伝承保存財団」を設立し、ポロトコタンを運営	『アイヌ文化伝承記録ビデオ大全集』（財団法人アイヌ無形文化伝承保存会）シリーズ開始、1976年から2003年まで、全7シリーズ33巻
1977年			『イヨマンテー熊おくり』グループ現代
1978年	国鉄「いい日旅立ち」キャンペーン開始		『アイヌの丸木舟』民族文化映像研究所 『沙流川アイヌ・子どもの遊び』民族文化映像研究所
1984年	「アイヌ古式舞踊」、国の重要無形民俗文化財に指定	アイヌ民族博物館、開館。フィンランド・サーミの代表団をゲストに招待。交流が盛んになり北欧各地でアイヌ文化展と舞踊公演を開催	『沙流川アイヌ・子どもの遊びー冬から春へ』民族文化映像研究所
1987年	アイヌ民族代表が初めて国連先住民作業部会に参加	北海道博物館交流協会との共催により、「ソビエト連邦極東少数民族展」を開催	
1988年	北海道、北海道議会及び北海道ウタリ協会が、「アイヌ民族に関する法律」制定を国に要望	サハリン州立博物館・ハバロフスク郷土博物館において「アイヌ文化展」開催	『アイヌ古式舞踊 平取・釧路編』北海道アイヌ古式舞踊連合保存会
1989年		北方民族国際フェスティバル開催	『アイヌ古式舞踊 浦河・帯広編』北海道アイヌ古式舞踊連合保存会
1990年	国連総会は1993年を「世界の先住民のための国際年」とすることを採択		『アイヌ古式舞踊 静内・旭川編』北海道アイヌ古式舞踊連合保存会
1991年		アイヌ民族博物館入場者数の最高を記録（87万1621人）	
1992年			『アイヌ 白老村の生活』『アイヌ 北海道二風谷における悪霊払いの儀礼 ウエボタラ』『アイヌ 北海道二風谷における家の新築祝い チセイノミ』『熊祭』財団法人下中記念財団 EC 日本アーカイブズ・東京シネマ新社 『トノトカムイ 酒の神様』萱野志朗
1993年	国連、1994年から「世界の先住民の国際10年」の開始を決議	サハリン州立博物館、サハリン・ノグリキ町博物館と博物館交流に関する覚書締結	

年	国・北海道	白老	アイヌ民族・アイヌ文化に関わるおもな記録映画
1994年		先住民国際フェスティバル開催	
1995年	「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」(内閣官房長官の私的諮問機関)設置	大英博物館人類館の "The Ainu of Japan" に関連した舞踊公演	
1996年	「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書提出	フィンランド・デンマークにてアイヌ古式舞踊公演	『シリムカのほとりで—アイヌ文化伝承の記録』民族文化映像研究所
1997年	札幌地裁にて二風谷ダム裁判結審。アイヌ民族の先住性を認定する判決が確定 「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」の公布・施行、「北海道旧土人保護法」廃止	台湾にて「国際先住民芸能フェスティバル」に出演	
1999年		先住民国際フェスティバル in 白老開催	
2000年	国は「アイヌ文化振興等施策推進会議」を設置。伝統的生活空間（イオル）再生事業の検討開始		『アイヌ生活文化再現マニュアル』（アイヌ文化振興・研究推進機構）映像シリーズ開始。2019年からアイヌ民族文化財団に事業引き継ぎ
2002年	北海道において「伝統的生活空間（イオル）再生構想の具体化に向けて」を策定。「アイヌ文化振興等施策推進会議」を開催（国主宰）		
2004年	国連、第2次「世界の先住民の国際10年」を採択		
2006年		アイヌの伝統的生活空間（イオル）再生事業開始	『AINU Past and Present』 国立歴史民俗博物館
2007年	国連、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」採択		
2008年	衆参両院において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択		
2009年	4月、北海道ウタリ協会が北海道アイヌ協会に名称変更 12月、「アイヌ政策推進会議」設置	白老民芸会館解体	
2010年		アイヌ政策推進会議「民族共生の象徴となる空間」整備地を白老に選定	『TOKYO アイヌ』『TOKYO アイヌ』映像制作委員会
2011年			『アイヌ文化の伝承 2010』 国立歴史民俗博物館
2016年			『kapiw と apappo』 office+studio T.P.S オリオフィルムズ
2018年		3月31日、アイヌ民族博物館閉館	『Ainu ひと』 GARA FILMS 『ポロトコタン最後の一日』一般財団法人アイヌ民族博物館 「ムックリの響き—伝統と創造の過去 現在 未来—」日本口琴協会・東京シネマ新社
2019年	5月、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」施行		
2020年		7月12日、国立アイヌ民族博物館を含む民族共生象徴空間（愛称ウポポイ）開業	『Future is MINE—アイヌ、私の声—』3ミニット 『アイヌモシリ』シネリック・クリエイティブ、ブースタープロジェクト 『カムイシェプ サケ漁と先住権』藤野知明

登壇者の紹介

うちだ じゅんこ
内田 順子

国立歴史民俗博物館民俗研究系・教授

- ・『映し出されたアイヌ文化—英国人医師マンローの伝えた映像』(吉川弘文館／2020年)
- ・『DVDブック 聽る民俗映像 渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』
共編著(岩波書店／2016年)
- ・「映像の共有と諸権利：国立歴史民俗博物館における民俗研究を目的とした映像制作を事例として」
『社会学評論』65(4)(2015年)

おかだ かずお
岡田 一男

株式会社東京シネマ新社・代表取締役

- ・「映像史における渋沢・宮本フィルムの価値とその保存・継承」『DVDブック 聽る民俗映像 渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』pp.25-50(岩波書店／2016年)
- ・研究ノート「ニール・ゴードン・マンローの1930年代アイヌ民俗誌映画への取り組み ウウェポタラ(悪霊払い)の記録を中心に」国立歴史民俗博物館研究報告第168集、pp.119-150(国立歴史民俗博物館／2011年)
- ・"The Ainu in Ethnographic Films" pp.187-191, AINU Spirit of Northern People, 1999

たていし しんいち
立石 信一

国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 展示企画室・学芸主査

(公益財団法人アイヌ民族文化財団)

- ・「北海道白老町 国立アイヌ民族博物館、町と人の記憶」『REKIHAku』山田慎也・内田順子・橋本雄太編(国立歴史民俗博物館／2020年)
- ・『アイヌ語地名を地形で巡るシラオイ・ノボリベツ』(一般財団法人アイヌ民族博物館／2017年)
- ・『アヨロ通信 1号』(2018年)

の もと まさひろ
野本 正博

公益財団法人アイヌ民族文化財団民族共生象徴空間運営本部・文化振興部長

- ・ウポポイ（民族共生象徴空間）ウエカリチセ（体験交流ホール）伝統芸能上演プログラム－アイヌの祈り・歌・踊り『イノミ』、『シノッ』演出（公益財団法人アイヌ民族文化財団／2020年）
- ・ドキュメンタリー映像『ポロトコタン最後の一日』脚本・編集
(一般財団法人アイヌ民族博物館／2018年)
- ・「イオルプロジェクトからみる先住民族としてのアイヌ」『「先住民」とは誰か』pp.318-335
(世界思想社／2009年)

かすが あきら
春日 聰

多摩美術大学・非常勤講師、国立歴史民俗博物館・客員准教授

- ・映画『からむしのこえ』監督・編集：分藤 大翼 撮影・録音：春日 聰
(製作：国立歴史民俗博物館／2019年)
- ・「祭祀芸能を記録する—民族誌映像における音の考察」『年刊 藝能』第25号、pp.41-52
(藝能学会／2019年)
- ・「日本列島の古代における音の超越性—祭祀儀礼と神事芸能の諸相から—」
『万葉古代学研究年報』14号、pp.73-175 (奈良県立万葉文化館／2016年)

かわむら きよし
川村 清志

国立歴史民俗博物館民俗研究系・准教授

- ・民俗研究映像『明日に向かって曳け』監督(製作：国立歴史民俗博物館／2016年)
- ・「民俗文化資料のデジタルアーカイブ化の試み—文化資源化と研究分野の更新に向けて」
国立歴史民俗博物館研究報告第214集(国立歴史民俗博物館／2019年)
- ・『民俗学読本—フィールドへのいざない—』高岡弘幸、島村恭則、川村清志、松村薰子共編
(晃洋書房／2019年)

アイヌ民族を撮影した人類学映画の歴史—1925年撮影、 八田三郎『白老コタン アイヌの生活』を中心に

岡田 一男（株式会社東京シネマ新社）

映像人類学をはじめ学術映像のもつ機能の中には、①時間を追って変化する現象を記録し、繰返し再生して、情報を多人数で共有し、研究することを可能にすることや、②急激に変容する、あるいは失われようとしている事象を記録に残すことにより後世に伝えること、③稀にしか起こらなかったり、簡単には見ることの出来ない事象を手軽に見ることが出来るようになるなど、色々あるが、それらの試みは、19世紀後半のさまざまな科学技術の発展の中で、一定時間間隔で連続的に写真を撮ることから始まった。こうした試みのうち、馬の走行や、鳥の飛翔、人間のさまざまな動作の研究などが良く知られているが、その一番早い試みを、イタリアの科学映画作家、ヴィルジリオ・トジは、ユネスコのためにまとめた「映画と科学的研究」1977年、という小冊子の中で、フランスの天文学者、ジュールス・ジャンセンによる1874年の長崎市金比羅山で行った金星の太陽面通過観測としている。一般的に映画の誕生は、フランス、リヨンの工業家、リュミエール兄弟による、記録されたフィルムをスクリーン上に映写した1895年のシネマトグラフとされる。彼らの功績は、およそ20年にわたる先行者たちの試みを集大成して時代の要請に答えたことがある。

リュミエール兄弟は、映像人類学に貢献する二つの重要な発明を行っている。1895年のシネマトグラフは、劇映画製作への重要な第一歩でもあるが、世界中の様々な民族の暮らししぶりを生きいきと伝える記録手段ともなった。もう一つは1903年の最初期のカラー写真技法オートクローム・リュミエールだ。動画の記録手段とはなりえなかつたが、アルベール・カーンの「地球映像資料館」の72,000点の静止画が遺された。シネマトグラフの発明は大きな反響を呼び、彼らは世界中に操作するスタッフとシネマトグラフ機器一式を貸し出すシステムを編出した。リヨンへの留学時代よりリュミエール兄弟の友人だった京都の染料商、稻畠勝太郎は、リュミエールの代理人として契約し、1897年、技術者やシネマトグラフ機器と共に帰国した。シネマトグラフは、映写機を組み替えると撮影機にもなった。リュミエール社の世界中に派遣された技術者たちは任地で上映活動の傍ら、さまざまな事物を撮影した。こうして初めて記録された明治期日本の事物の中に、最も古いアイヌの記録である、男性と女性の踊りが含まれている。撮影したのは、リュミエール社のフランス人技師コンスタン・ジレルであるが、残念ながら彼は撮影をした集落名を書き記さなかった。室蘭に行ったことは、はっきりしているが、つてとしてはフランスの宣教団を頼ったとされるが、それから先、何処へ向かったのか？今もって不明である。上映巡業を兼ねた旅行と思われる所以、巡映ルートからの撮影地の割出に期待したい。

人類学者が、フィールド調査に映画カメラを携行する最初の試みは、英國ケンブリッジ大学、アルフレッド・コート・ハッドンによる1898～99年のトレース海峡先住民人類学調査で、英國のニューマン＝ガーディア製の映画カメラを携行した。彼らはフィールドに7か月間滞在したが、撮影に充てられたのは最後の3日間だけだった。というのも携行したカメラは現地到着までに破損してしまい、修理に送り返さざるを得なかつた。新しいカメラは迎えの船が届けたのだろうか？現存するのは、わずかに呪術的な踊りと火鉢による火起しの映像に過ぎない。一方、音声記録は順調にワックス・シリンダー約100本が録音され、オーストラリア国立アーカイブに保存されている。ハッドンの随行者の中に若い内科医チャールズ・ガブ

リエル・セリグマンがいた。セリグマンは、1929年に英国王立人類学協会(RAI)会長として夫妻で来日した際、ニール・ゴードン・マンローの二風谷でのアイヌ研究に映画手段を投入することを強く推し、マンローの指導教官となった。

初期アイヌ映画は、残存する、ほぼすべてが、外国人が記録したものである。19世紀末から20世紀初めは帝国主義の時代だった。欧米列強各国は海外に植民地を経営し、そこで得た文物を収集して博物館に陳列して、競って自らの成果を誇った。映画はそうした繁栄を誇示する格好のツールだった。またこの時代はジャポニズムの時代でもあり、日本は欧米諸国の興味の的でもあった。西欧人がアイヌに注目したのは、アイヌが極東の人種的孤島に生きる白人種の一員であり、怒涛のごとく押し寄せる黄色人種の大波に飲み込まれようとしているという幻想があったからだ。そこでの決まり文句が、「滅び行く民族」なのである。昨年秋、国立映画アーカイブで、「日本のアイヌ」という短いクリップが、上映されたが、正確な題名は「日本の滅び行く民族、アイヌ」であった。英国映画協会(BFI)所蔵となっているが、もともとはスイス、イエズス会司祭、ジョアのコレクションの一部で、ドイツ語字幕版である。トップクレジットの「セリグ・ポリスコープ」は、当時シカゴに存在した製作会社である。1912年に沙流川流域で撮影されたというが、同時期、北海道で調査活動していた人物に、シカゴ大学教授の日本学者フレデリック・スターがいる。2020年の秋、二風谷アイヌ文化博物館の調査で、このフィルムの撮影地は、平取本町の義経神社下付近の当時のアイヌ集落の中心部と判明した。スターは助手に映画を撮らせたというが、未だ彼と確実に関連するアイヌの映画は他に見つかっていない。

白老で撮影したことが確実なフィルムには、1917～18年に記録されたベンジャミン・プロツキーの「ビューティフル・ジャパン」という未完成作品の一節がある。確実な日時は未確定だが、撮影隊が北海道に向かう途上に青函連絡船を待つ記念写真が残っており出演米人俳優男女を伴った大部隊だったことが判っている。7年後に撮られた八田のフィルムで、重要な役割を果たした白老のコタンコロクル(村おさ)、熊沢エカシテパら古老たちが写っている。

さて本題の八田三郎の「白老コタン アイヌの生活」1925年撮影であるが、幾つかの点で非常に重要なフィルムである。あくまでも今日確認されているということでだが、①不完全ながらも完成ネガ原版が残存している、②日本の大学研究者が、直接関わった、③作者自身による作品構成や製作意図など明確な文字資料が残っている最も古いアイヌ民族を記録したフィルム作品である。と同時に、映画誕生から30年を経て、既にこの当時、北海道札幌には、充分な映画撮影を行える技術インフラ=映画制作会社が営業し、八田は、ごく当たり前の発想で映画による記録を思い立った感じで、初めて何かを行うと言った気負いが全く感じられない。

八田は、1926年に東京で第3回汎太平洋学術会議が開催されることを受け、訪れる外国からの賓客に紹介する目的で、アイヌを紹介する映画を製作することを思いついた。自ら主任として管理する北大農学部博物館に展示されている陳列アイヌの物品と現実のアイヌの暮らしづくりに著しい文化変容を痛感していた八田は、白老で1925年現在のアイヌの暮らしをそのまま記録するのではなく、一時代前の、よりアイヌらしい暮らしづくりを映画により再現しようと試みた。

という次第で最初に完成したのは英語版である。その翌年に、英語の中間字幕類を外し、日本語字幕に差し替えた日本語版が製作した。日本語版には、英語版には見当たらない白老の当時のアイヌ集落の外景が冒頭部分にある。2000年代になって、完成原版を精査し、フィルムの製造年を示すキーワードから、外景部分のフィルムは1926年製造のフィルムで、追加撮影が行われたことが判明した。

八田は、撮影にあたり、地元でアイヌの調査を続けていた白老郵便局長、満岡伸一を通じ、白老アイヌのコタンコロクル、熊坂エカシテパに協力を依頼した。八田の構想を巡ってコタンの人々は協力

するか否かで二分されてしまい、協力を是とする人々のみが、撮影に参加したという。後年、白老町に民営のアイヌ民族博物館が創立されたとき、創立に尽力された方々は、これら協力した人々の子孫であったと聞く。日本語版は、丸の内の日本工業俱楽部講堂で開催された啓明会第18回講演会で公開上映され、その講演集に八田自身によるフィルム内容の構成詳細と企画趣旨が掲載されている。

この八田フィルムは、八田が在籍した北大農学部応用動物学教室に、1970年代初めまで保管されていた。筆者らは、1970年に財団法人下中記念財団が、国際学術映画収集・公開運動、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを導入するにあたって、財団内に設けられるEC日本アーカイブズに参画し、以後運営にあたったが、創立時に様々な日本発のECフィルム収蔵フィルムの候補テーマを検討した時、北大理学部の地質学者、湊正雄から、北大所蔵のアイヌフィルムから始めることを強く勧められた。そして1972年に、ECフィルム収録を前提に、北大より保管されていた35mm、16mmフィルムを借出し、整理を始めた。

調べたところ、日本語版ネガ原版には欠落部分があり、葬儀、千歳川における丸木舟による鮭漁などが無かった。1970年代後半に、EC運動の本部にあたる、ドイツ国立科学映画研究所(IWF)の協力でドイツの現像所で複製フィルムの作成を行ったが、欠落部分の処理と、財団自体の財政事情から、80年代を通じて最終処理には進まなかった。90年代初め、予算処置がとられて、再起動した際、当時の民営アイヌ民族博物館の情報提供で、八田が先に製作した英語版35mmポジプリントの現存、原版欠落部分が揃っていることが判明した。そこで、1992年に日本語版複製ネガの画像と英語版ポジ画像、双方のデジタル画像データを統合した、下中記念財団復元版を制作した。

ざっと構成を記すと、①集落外景 ②家事（挨拶、薪運搬、子守、水汲み）、手芸（糸紡ぎ、アツトウシ織り）③婚礼（婿入婚、炉端の儀式、結納、イナウ、祝宴）④病気治療 ⑤葬儀（団子づくり、遺体を着物で覆い花ゴザで包む、屋外への遺体搬出、墓標運搬と葬列、埋葬・土葬と墓標）⑥熊送り ⑦舞踊 ⑧操舟と鮭漁

撮影当時の新聞記事によると、室内撮影は、熊坂エカシテパ宅で行われ、電灯照明が使用された。撮影には、白老村の行政や、地元の企業、王子製紙も協力しており、照明用電源の電線引込や千歳川での撮影の便宜を提供した。八田の撮影の5年後、二風谷で、当地のコタンコロクル、貝沢シランペノらの協力で、スコットランド人医師、N.G.マンローによるイヨマンテ（熊送り）の撮影が行われ、マンローは1930年から35年まで、ウウェポタラ（悪霊払い）の記録を自ら16mmカメラを使用しつつ、時に35mm撮影班も招いて撮影を続けたが、遂に電灯照明は行えず、チセの屋根の一部を取り外し、太陽光で室内撮影を行わねばならなかった。それと比べると、1920年代半ばの白老は、はるかに恵まれていたと言えるだろう。

北大において八田らアイヌに関心を持つ教官有志は、学部横断的な北方文化研究会を組織していた。会のとりまとめ役をしていた八田の農学部応用動物学教室の後継教授、犬飼哲夫は、1935年に、旭川近文の熊送りを当地のコタンコロクルとしてだけでなく、日本国有鉄道の測量技手としても知られる、川村力子トアイヌに依頼して近文の熊送りを記録している。八田 - 白老 - 1925年、マンロー - 二風谷 - 1930年、犬飼 - 近文 - 1935年と、5年おきの熊送りの映像が遺されていることになる。北方文化研究会は、1942年にマンローが二風谷で逝去した際、丁重な弔文を未亡人に送るとともに、大学総長に、逸散を防ぐため遺品となった映画フィルムの手許金による入手を建議した。

第一段階の専ら外国人によって記録されたものから始まって、第二段階は八田のような日本人研究者の関与する時代となり、戦後の第三段階では、プロダクションが地域行政など、さまざまな受注で、製作を行うこと、NHKなどのテレビ番組の中で記録されることが多なくなったが、和人の記録者が、和人の監修者を立てて行われ、アイヌは被写体という受身の形が多かった。第四段階として1970年代以降、アイヌ

自身の関与がより積極的になり、共同作業の形がとられるようになった。1990年代後半に筆者は、米国スミソニアン協会の企画展図録にアイヌ民族誌映画の発展史を概説する機会を得たが、その第五段階は、アイヌ自身による自民族の記録の始まりと記した。

家庭用のビデオカメラやスマートフォンの動画記録機能により、誰でも記録装置を持っている時代が到来している。外国に目を向けると、カナダやアラスカ先住民は、公的支援により、自らのTV放送局を持ったり、地域の地場産業としての映像制作が行われたり、自らの見解を世界に向かって堂々と発信する先住民映像作家が出現している。ロシアのシベリアや極北の先住民も、こうした先行例に刺激を受けており、北欧でもサミなど先住民が多く学ぶ大学で、映像人類学の講座が持たれている。

2020年、国立歴史民俗博物館、北海道大学植物園・博物館、公益財団法人アイヌ民族文化財団から国立映画アーカイブに懸案であった可燃性35mmフィルムなどの寄贈処理が行われ、相模原収蔵庫の重要な文化財級の貴重フィルムとともに多くのアイヌ初期映画が保存されることになった。国立映画アーカイブでは、戦前日本では必ず行われていた内務省検閲の記録との照合など新たな調査が始まっている。国立映画アーカイブに外部からの映像使用要請があった場合には、アイヌ民族の人権に配慮した適切な助言が得られるよう、旧所蔵者のみならず、当該アイヌ民族の居住地域と繋がりのある博物館などと連絡することが申合わされた。確実な保存処置が重要なのは言うまでもないが、それらの映像情報が、如何に有効活用できるかが、明日にむかっての私たちの課題である。若い世代のアイヌ民族文化の復興、発展に寄与できてはじめて、先人たちの動く映像による記録を遺した苦労は、報われる所以である。

映画制作の主体とは— 旧アイヌ民族博物館の記録映像制作をとおして

内田 順子（国立歴史民俗博物館）

1. 歴博研究映像『アイヌ文化の伝承 白老 2010』の概要

現代のアイヌ文化の伝承活動に焦点をあて、その具体的な取組みを映像で記録し、現在進行形の文化伝承のすがたをひろく知ってもらうことを目的として、2010年度、二風谷と白老を対象として、歴博の研究映像の制作を進めた。2013年3月にリニューアルオープンした歴博の総合展示第4展示室（民俗）において、二風谷と白老におけるアイヌ文化の伝承活動を紹介する展示（写真1）を作るにあたり、それと連動して制作した映像である。アイヌ文化の現在のすがたから、何を選び、どのように映像や展示で紹介するのが適切なのか、展示プロジェクト委員をお願いしていた貝澤耕一氏・野本正博氏と相談しながら制作を進めていった。

二風谷と白老を選んだ理由のひとつに、この両地域が、古くからアイヌ文化の代表的な伝承地として注目されてきたことがあげられる。そして2000年代に入って以降も、たとえば、アイヌ文化の伝承を図るための国の施策のひとつである「アイヌの伝統的生活空間（イオル）再生事業」が、白老では2006（平成18）年、二風谷では2008（平成20）年に、ほかの伝承地に先駆けて開始されるなど、アイヌ文化の重要な伝承地であり続けている。とりわけ白老は、歴博の研究映像を制作した2010（平成22）年に、「民族共生の象徴となる空間」の整備地として選定されるなど、アイヌ文化の代表的な伝承地域としての新たな局面を迎える時期でもあった。



写真1 歴博 第4展示室（民俗）「アイヌ民族の伝統と現在」

2. 文化伝承活動＝博物館活動の「主体」をテーマとして

白老は、1892年に鉄道が開通するなどして、早くから観光化が進んだ地域である。観光客向けにアイヌ文化を紹介する施設「ポロトコタン」が、1965（昭和40）年にポロト湖畔に設けられたが、アイヌ文化を見せる主体は誰であるべきなのか、という批判が強まり、1976（昭和51）年、地元のアイヌ民族を中心とした新しい財団による運営が始まり、1984（昭和59）年、アイヌ民族博物館が設立された。それまで観光一辺倒だった文化紹介が、学術的な調査・研究の成果に基づいたものとなり、アイヌ民族博物館は、アイヌ文化に親しむことのできる「社会教育の場」であると同時に、アイヌ文化の調査・研究および文化伝承の「実践の場」として機能することになった。白老のアイヌ文化の伝承を、アイヌ民族博物館の活動を通して映像化することは、必然的に、「博物館」という場における文化伝承活動の「主体」、あるいは、博物館活動の「主体」のありようを問う視点を持つことにつながった。

3. 作品データ

2010年度のアイヌ民族博物館の活動のうち、何を撮影するのかについては、当時、アイヌ民族博物館の職員であった野本正博氏にご提案いただいた。撮影・編集は、野本氏と意見交換をしながら、おもに内田が担当した。インタビューは用いず、博物館の活動として一般に公開されている場面を中心に撮影・編集することで、アイヌ民族博物館の特色や活動の理念を浮かび上がらせるを目指した。

『アイヌ文化の伝承 白老 2010』 40分、2010年度制作（2011年度完成）

撮影：内田順子・城石梨奈

写真撮影：貝澤耕一・勝田徹

編集：内田順子

協力：アイヌ民族博物館

制作協力：野本正博

製作・著作：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

【構成】

(1) 白老とアイヌ民族博物館の紹介（観光の幕開け～博物館ができるまで）

(2) アイヌ民族博物館の活動

- ①夜間特別公演「ポロトコタンの夜」
- ②河川をめぐるアイヌ文化の例「ペッカムイノミ」
- ③海漁をめぐるアイヌ文化の例「シリカプの送り」
- ④移動博物館（横浜での開催のようす）
- ⑤国立博物館の設置計画と博物館展示の「主体」

* 本日のフォーラムでは、(2) -②を除いた短縮版を上映

4. 映像制作の主体

「誰が映像を見せたり、編集したり、保存したり、解釈したり、活用するのを許されているのか」(Derrida, Jacques et Stiegler, Bernard, 1996, *Échographies – de la télévision*, Galilée-INA. 原宏之訳『テレビのエコーグラフィー』NTT出版、2006年) という問いは、映像のアーカイブに関連してデリダが述べたことだが、民族誌映画の文脈で考えると、ジェイムズ・クリフォードとジョージ・マーカスらによる、民族誌を

書くという営みが孕む、研究する側とされる側の非対称な権力関係を解体することの提唱 (Clifford, James and Marcus, George E. ed., 1986, *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press. 春日直樹他訳『文化を書く』紀伊國屋書店、1996年) と通ずる問い合わせるように思われる。民族(俗)学において制作される映像が、「研究者と調査地の人々はともに映像制作の主体である」(村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学一人類学の新たな実践へー』せりか書房、2014年) ように作られることの重要性は、ドキュメンタリー映画の父と呼ばれるロバート・フラハティ (1884-1951) が、イヌイットを題材として制作した『極北のナヌーク』(1922年) を見れば明らかである。

フラハティは、民族学者としての、また映画製作者としての素養もなかったが、現地で長期調査をおこない、そこでの生活体験をふまえ、撮影をおこなった。フラハティは、撮影した映画を映写して、撮られた人びとに見せ、互いに批評しあうなど、現地の人びとの徹底的な協働作業によって映画を作った。つまり、『極北のナヌーク』は、フラハティの映画であるとともに、ナヌークたちの映画でもある。「誰が映像を見せたり、編集したり、保存したり、解釈したり、活用するのを許されているのか」を問うことは、映像の作者(ここでは研究者)が、暗黙のうちに自らにあると了解している「制作し、上映し、保存し、解釈し、活用する側の特権」を見直すことにつながるだろう。

今日、民族(俗)誌映像の制作の文脈で求められるのは、いわゆる「作者=監督」ではないのかも知れない。誰かが作者として特権的に、自分の表現をすることよりも、複数のさまざまな作者が、互いに尊厳を守って主体的に関わり合う場を作ること、さらに、それらを総合して提示する役割を果たす人—作者というよりも、コミュニケーションの専門家—が必要とされているように思われる。



写真2 『アイヌ文化の伝承 白老 2010』より

アイヌ民族博物館から民族共生象徴空間へ —地域の記憶の映像化に向けて—

立石 信一（国立アイヌ民族博物館）

■ポロトコタンとウポポイについて

白老とポロトという「場」

近代に入ってから、白老は多くの観光客や研究者、あるいは皇室関係者などが来村したことなどによって、アイヌ民族の文化風俗を見られる地として知られるようになった。1924年に白老で刊行された『アイヌの足跡』という書籍には、「本道のアイヌコタン白老村へは四季を通じて隨分沢山の観察者が訪づる事程左様に白老はアイヌの国として知られた処である」という一文が「序」に寄せられている。

その後も観光客をはじめとして、多くの人が白老の〈アイヌコタン¹〉を訪れている。1964年には56万人余（『新白老町史』）が訪れたとされている。しかし、もともと人の生活域だったところが「観光地」となったため、多くの観光客が押し寄せたことによって衛生問題などを引き起こし、私宅などに勝手に入る観光客も絶えなかった。そこで、1965年に〈アイヌコタン〉は同じ町内のポロト湖畔に移転することとなった。移転した〈アイヌコタン〉は通称ポロトコタンと呼ばれるようになり、運営のために白老観光コンサルタント株式会社が設立された。1967年には同じ敷地内に白老町立の白老民俗資料館が開館している。1976年には同社を発展的に解散し、財団法人白老民族文化伝承保存財団が設立される。そして、1984年には地元のアイヌ民族が中心となり、アイヌ民族博物館²を開館させるに至る。

観光客も年を追うごとに増加の一途をたどり、最盛期の1991年には年間の入館者数が87万人を記録する。その後は観光ブームの沈静化や施設の老朽化などによって入館者数は減少していったが、近年は20万人前後で推移していた。そうしたなか、2011年には「民族共生の象徴となる空間（仮称）」の整備地としてポロト湖畔が正式決定される。そして国立アイヌ民族博物館を含む、民族共生象徴空間の開設準備に伴い、2018年3月31日をもってアイヌ民族博物館は、前身の観光施設時代と合わせて半世紀以上の歴史に幕を下ろした。

ウポポイの誕生と白老

民族共生象徴空間（以下、ウポポイ）ができる直接的なきっかけとなったのは、2007年の国連総会における「先住民族の権利に関する国際連合宣言」の可決と、こうした世界的な潮流の中で2008年に国会の衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が可決されたことだった。これを受けて政府は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」を設置するなど、その後の流れを決定

¹ コタンはアイヌ語で村の意味があるが、観光客が訪れることによって観光地の名称としても呼ばれるようになった。本稿では、本来持っていた村という意味よりも、観光地としてのコタンとしての意味を持つ場合に〈〉付けすることとした。また、白老はコタンに人がやってきてそこが結果として「観光地」とされたケースもあるなど、人の生活域としてのコタンと、観光地としてのコタンが明確に切り分けられないことも〈〉を用いる理由としている。

² 本稿では、2018年3月31日に閉館した一般財団法人アイヌ民族博物館を「アイヌ民族博物館」と表記し、2020年7月12日に開館した国立アイヌ民族博物館を「国立アイヌ民族博物館」と表記する。

づけていく。2009年に官房長官に提出された懇談会の報告書では、「民族共生の象徴となる空間」の構想とともに、新たな立法措置についても言及している。そうした流れの中で、2011年に民族共生空間の設置場所を白老とすることが正式に決定された。また、2020年が開業年とされたのは、2014年のアイヌ政策推進会議において、「オリンピック・パラリンピックに向けて整備する」とされたがゆえであり、この前後から整備が本格化することとなった。

ウポポイ設立の目的は、「アイヌ文化を復興・発展される拠点として、また、将来に向けて、先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴」となることであり、そのための「アイヌ政策の扇の要」として整備された。ウポポイにはアイヌ文化の歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとして、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰靈施設などがある。

こうした目的と機能をもったウポポイは、2020年7月12日、白老町のポロト湖畔に開業した。当初は4月24日の開業が予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け5月29日に延期され、さらにもう一度の延期を経ての開業となったのである。

■映像作品について

○「ポロトコタン最後の一日」(制作：2018年／撮影：2018年／22分)

脚本・編集：野本正博、立石信一

共同制作（撮影・編集）：株式会社メガ・コミュニケーションズ

企画・制作：一般財団法人アイヌ民族博物館

・概要（制作方針）

一般財団法人アイヌ民族博物館（ポロトコタン）は2018年3月に閉館した。この施設は地元白老のアイヌ民族自身が主体となり設立、運営した博物館であった。今後、歴史的な評価を受けて、北海道、日本の近現代史の中に位置付けられるだろう。一方で、ウポポイが開業するなど、白老とアイヌ文化を取り巻く環境は新たな段階へと入った。本作は、そのような大きな過渡期のなかで、節目となる閉館日の2018年3月31日に密着した記録映像である。

白老という一地域の博物館としてあったこと、そこで働く職員と来館者がどのように接し、あるいはアイヌ文化を紹介してきたのかを記録することを映像制作の目的とした。また、アイヌ民族博物館の前身は観光施設としてのポロトコタンであり、観光施設的な側面は閉館に至るまで保っていた。観光収入を財源として自主運営を行い、アイヌ文化の伝承と普及に寄与してきたことからも、観光的側面を博物館の特徴の一つとして描くことを試みている。

映像中には博物館で働いてきた2名の職員のインタビューを納めている。一人はポロトコタンの草創期から勤務し、文字通りポロトコタンの生き字引であり、アイヌ文化の伝承者として多くの後進を育ててきた。もう一人は就職したばかりでこれからを担っていくべき職員である。二人とも白老に生まれ育ち、小さな頃からポロト湖やポロトコタンに慣れ親しんできた。それだけにアイヌ民族博物館の閉館には複雑な心境をみせ、戸惑う面もあった。しかし一方で、ウポポイには大きな期待も寄せる。ポロトコタンで働いてきた職員にとって職場がなくなり新しい施設ができるとの意味、そのことで揺れる一時期があったことを記録するため、胸中を率直に吐露している場面はそのまま挿入することとした。

・構成

2018年2月18日（日）から3月31日（土）まで、アイヌ民族博物館ファイナル企画展として「ポロ

トコタン ウパシクマ～ポロトコタンを語り継ぐ～」が開催された。同展ではアイヌ民族博物館が所蔵する写真資料を中心に、ポロトコタンの変遷を紹介した。最終日となる3月31日には「ハルランナ」という特別イベントも行った。ハルランナは「食べ物が降ってくるよ」という意味のアイヌ語で、閉館に際してアイヌ民族博物館を支えてくれた多くの人に感謝の意を表する一日としたのである。

本作品の主となっているのは「ハルランナ」など閉館日のアイヌ民族博物館と職員の動きであり、構成は以下の通りである。

①ポロトコタンの歴史

②3月31日の様子

・出勤風景

- | | |
|-----------|--------------|
| ・最終日舞踊公演等 | : 特別展示室 |
| ・特別舞踊公演 | : サウンチセ |
| ・ハルランナ | : サウンチセ (屋外) |
| ・シンヌラッパ | : ポロチセ |

③インタビュー

④過去の映像資料

・ポロトコタンを舞台とした映像作品を制作することについて

観光地的な側面も有していたアイヌ民族博物館の映像は、個人によって発信されたSNSをはじめとしたインターネット上などで今でも簡単に見ることができる。それは見る側と見られる側、発信する側と発信される側の関係性が揺らぎ、博物館自身が発信する側である一方、発信される側にもなってきたことを意味する。そうした不特定多数の映像の中には、博物館側としては見せるべきではない場面、あるいは意図せざる切り取られ方をしている場面がある可能性があり、現にインターネット上にはこうした映像が散見される。

また、研究者と研究対象者、観光客と観光施設で働く者といった関係性によって、従来は双方のニーズ、すなわちアイヌ文化という側面に比重が置かれ、記録や調査研究、あるいは観光の対象とされてきた。

しかし、職員は職場であるアイヌ民族博物館に出勤し、舞踊スタッフは働くために普段着から伝統衣装に着替えてステージに立ってきた。こうした「日常の風景」がアイヌ民族博物館にはあった。最後の年は、隣接する土地で新しい博物館建設工事が始まっており、工事の音が施設内で聞こえるのが風景の一部ともなっていた。

こうした「日常の風景」は、アイヌ文化を記録することを主眼とした映像群には残ることがないかもしれません。しかし、アイヌ民族博物館とそこで働く職員自らが映像の制作主体となることによって、こういった「副次的」な部分も記録として残すことを意図した。

○「ウポポイの開業と、白老のいま」(制作: 2021年／撮影 2020-2021年／16分)

撮影・編集: 立石信一

・概要 (制作方針)

本作は、ウポポイの開業と、白老の今についての記録映像である。2020年7月12日、白老町のポロト湖畔にウポポイが開業した。2018年まであったアイヌ民族博物館の職員の多くは、閉館してから

のおよそ2年間、開業準備に携わり、この日を迎えた。今までの白老という地域の博物館から、ナショナルセンターとしてのウポポイへと変貌していく過程で、職員は何を感じ、ウポポイに対してどのような未来像を描いているのか。そして、国立といふいわば大きな物語ともいべき共有のプラットフォームの「場」であるウポポイと、地域に根ざす文化、あるいは個々の記憶、物語はいかに関係性を築けるのか、あるいはそれらは両立し得るのか。

映像の中では、「ポロトコタン最後の一日」でインタビューを行った2名の職員に引き続き密着し、普段の仕事風景やインタビューなどを記録した。ポロトコタンからウポポイへと環境が変化する中で、白老の「土地の記憶」に対するそれぞれの記憶や思いに焦点を当てた。

プラットフォームとしてのウポポイと地域の記憶の関係性は、ウポポイの中だけにはとどまらない。映像では、白老町内に居住し、親の代から木彫り業を行いつつ、アイヌ民族博物館の閉館までポロトコタンで土産物屋を営んできた木彫家の現在も記録した。木彫りや土産物屋が白老やポロトコタンを支えてきたという木彫家の思いは強い。ポロト湖畔への〈アイヌコタン〉の移転からアイヌ民族博物館の閉館まで、土産物屋も一体となって「場」を形成し、それらがポロトコタンを表象し、あるいはアイヌ文化のイメージとなってきた面もある。こうした「場」がアイヌ民族博物館の閉館に伴いどのように変化したのか。木彫りや土産物屋を担ってきた人に注目することによって、こうした変化を捉えることを試みた。

・構成

- ①ウポポイ開業記念式典／開業日
- ②ウポポイでの仕事風景
- ③白老町内の木彫りの制作風景
- ④インタビュー

■地域の記憶の映像化に向けて

【本作の制作背景・条件】

- ・本作の制作者である筆者は白老町出身ではないが、ポロトコタンに10年以上勤め、現在はウポポイに勤務している。そのため、ウポポイ職員である撮影対象者との関係性は、同じ職場で働いている同僚となる。また木彫家とは、ポロトコタンに職場を持っていた者同士、頻繁に顔を合わせていた。したがって、本作の撮影対象者の人選、撮影内容などには少なからずそのような関係性が反映されている。
- ・映像を制作するうえで対象者としたのはいずれもポロトコタンと関係があり、かつ白老町の出身者である。一方、ウポポイには各地域のアイヌ民族や日本各地の出身者はもとより、世界各国の出身者も多数おり、多様な人材によって成り立っている。したがって、本作はこうしたウポポイの全体像を捉えることを目的としたものではなく、また、実際に本作では全体像を捉えることはできない。
- ・「地域の記憶」として取り上げたのは、木彫りを行う木彫家である。アイヌ文化に限っても、「アイヌ語教室」や刺繍など、地域におけるアイヌ文化を担う人、場は様々である。それにもかかわらず木彫りに注目したのは、アイヌ民族博物館とともにポロトコタンという「場」を形成してきたのが土産物屋であり、そのなかでも木彫りのもつ意味合いの大きさからきている。1960年代の北海道観光ブーム以降、当時の北海道観光の土産物の代表的なものといえば木彫り熊であった。「彫れば売れる」と言われるほどであった木彫りは産業として多くの従事者がおり、生業としての生活文化を築いていたのである。したがって、木彫りが土産物だけにはとどまらない「地域の記憶」であると本作では位置付け、取り上げることとした。
- ・撮影にあたって、撮影対象者に対して制作者側から具体的な要望を出すことなどは基本的にはしていない

い。また、撮影にあたっての環境や衣装などについても、制作者から意見を出したり、手を加えることなどはほとんど行っていない。どこで撮影するか、何を撮影するか、どのように撮影するかなどを制作者と撮影対象者の間で相談し、決めていくことは状況に応じて行ったが、それは対象者の意向を聞くことを主目的としたものであった。それはその場を記録、映像化し、地域の記憶のひとつとすることを映像の制作目的としていたからである。

・ インタビューについては制作者の考えた質問項目をもとに行った。また、インタビュイーごと 1 時間近くの場面があるなかから、どの場面を使うかを決めたのは制作者である。

→本作は、ある側面だけを対象としたものであり、より多様な構成による地域の記憶の映像化に向けた試みは今後の課題である。

国立歴史民俗博物館の研究映像

歴博では1988年より、民俗研究の一環として「民俗研究映像」の制作をおこなってきました。

①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であること、そして④研究成果の発表の手段としての映像による論文であること、という基本方針のもと、制作担当者である研究者自身が、企画から完成までの全てのプロセスに関わり、撮影や編集など、それぞれの研究対象に応じた工夫を凝らし、制作している学術映像です。現在、「歴博研究映像」として受け継がれています。

歴博研究映像一覧表

制作年度	題名	制作担当者	規格
昭和63年度	芋くらべ祭の村—近江中山民俗誌—	上野和男・岩本通弥・橋本裕之	カラー・日本語・100分
昭和64年度	鹿島様の村—秋田県湯沢市岩崎民俗誌—	岩井宏實・福原敏男	カラー・日本語・59分
平成2年度	椎葉民俗音楽誌 1990	小島美子	カラー・日本語・120分
平成3年度	金沢七連区民俗誌 第1部 都市に生きる人々 第2部 技術を語る	小林忠雄・菅豊	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・45分
平成4年度	黒島民俗誌—島譜のなかの神々— 黒島民俗誌—牛と海の賦—	篠原徹・菅豊	カラー・日本語・60分 カラー・日本語・60分
平成5年度	景観の民俗誌 東のムラ・西のムラ	福田アジオ・篠原徹・菅豊	カラー・日本語・各58分
平成6年度	観光と民俗文化—遠野民俗誌 94/95— 民俗文化の自己表現—遠野民俗誌 94/95— 遠野の語りべたち	川森博司	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・29分
平成7年度	沖縄・糸満の門中行事—神年頭と門開き—	比嘉政夫	カラー・日本語・110分
平成8年度	芸北神楽民俗誌 第1部 伝承 芸北神楽民俗誌 第2部 創造 芸北神楽民俗誌 第3部 花	新谷尚紀	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・48分 カラー・日本語・29分
平成9年度	風の盆ふいりんぐ—越中八尾マチ場民俗誌—	小林忠雄	カラー・日本語・90分
平成10年度	大柳生民俗誌 第1部 宮座と長老 大柳生民俗誌 第2部 両墓制と盆行事 大柳生民俗誌 第3部 村境の勧請縄	新谷尚紀・関沢まゆみ	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・36分 カラー・日本語・16分
平成11年度	沖縄の焼物—伝統の現在	松井健・篠原徹	カラー・日本語・83分
平成12年度	風流のまつり 長崎くんち	福原敏男・久留島浩・植木行宣	カラー・日本語・94分
平成13年度	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二・内田順子	カラー・日本語・90分
平成14年度	物部の民俗といざなぎ流御祈祷	松尾恒一・常光徹	カラー・日本語・83分
平成15年度	出雲の神々と祭り 第1部 美保神社 出雲の神々と祭り 第2部 佐太神社 出雲の神々と祭り 第3部 荒神祭り	関沢まゆみ・新谷尚紀	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・15分

制作年度	題名	制作担当者	規格
平成 16 年度	現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業 —長野県飯田下伊那地方 村落における公共施設での葬儀 —長野県下條村宮嶋家 都市近郊における斎場での葬儀 —長野県飯田市佐々木家 葬儀用品問屋と情報	山田慎也	カラー・日本語・45 分 カラー・日本語・45 分 カラー・日本語・45 分 カラー・日本語・45 分
平成 17 年度	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子・鈴木由紀	カラー・日本語・102 分
平成 18 年度	伝統鴨猟と人々の関わり—加賀市片野鴨池の坂網 猟—	安室知	カラー・日本語・37 分
平成 19 年度	興福寺 春日大社 —神仏習合の祭儀と支える人々— 薬師寺 花会式—行法と支える人々—	松尾恒一	カラー・日本語・71 分 カラー・日本語・71 分
平成 20 年度	筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと— [本編] 筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—[列伝篇]	小池淳一	カラー・日本語・52 分 カラー・日本語・99 分
平成 21 年度	平成の酒造り [製造編] 平成の酒造り [継承・革新編]	青木隆浩	カラー・日本語・88 分 カラー・日本語・88 分
平成 22 年度	アイヌ文化の伝承—平取 2010 アイヌ文化の伝承—白老 2010	内田順子	カラー・日本語・40 分 カラー・日本語・40 分
平成 23 年度	比婆荒神神楽—地域と信仰—	松尾恒一	カラー・日本語・69 分
平成 24 年度	石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新— [本編] 石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新— [技術編] 石を切る—花崗岩採掘の伝統と革新— [インタビュー編]	松田睦彦	カラー・日本語・69 分 カラー・日本語・51 分 カラー・日本語・59 分
平成 25 年度	盆行事とその地域差—盆棚に注目して— 土葬から火葬へ—両墓制の終焉— 甑島の盆行事	関沢まゆみ	カラー・日本語・50 分 カラー・日本語・28 分 カラー・日本語・20 分
平成 26 年度	屋久島の森に眠る人々の記憶	柴崎茂光	カラー・日本語・80 分
平成 27 年度	明日に向かって曳け—石川県輪島市皆月山王祭の 現在—	川村清志	カラー・日本語・102 分
平成 28 年度	モノ語る人びと 津波被災地・気仙沼から	葉山茂	カラー・日本語・63 分
平成 29 年度	二五穴—この水はどこへ行くのか— 二五穴—水と米を巡る人びとの過去・現在・未来 —	西谷大・島立理子・ 内田順子	カラー・日本語・20 分 カラー・日本語・40 分
平成 30 年度	からむしのこえ	分藤大翼	カラー・日本語・93 分

×モ

ご案内

【展示のご案内】

○第3展示室特集展示「紀州徳川家伝来の楽器－こと－」

会期：2021年5月25日（火）～2021年7月4日（日）

○企画展示室特集展示「黄雀文庫所蔵 鮫絵のイマジネーション」

会期：2021年7月13日（火）～2021年9月5日（日）

○くらしの植物苑特別企画「伝統の朝顔」

会期：2021年8月3日（火）～2021年9月5日（日）

【催事のご案内】

第36回歴博映画の会「市場と人びと」

日時：2021年7月10日（土）13:30～15:30

場所：国立歴史民俗博物館講堂

申込：要事前申込

その他：聴講無料

第433回歴博講演会「幕末の風刺画と鮫絵」

日時：2021年8月14日（土）13:00～15:00

場所：国立歴史民俗博物館講堂

申込：要事前申込

その他：聴講無料

※新型コロナウイルス感染症拡大状況により、展示・各種催事が変更・中止となることがあります。

最新の情報は当館ホームページ等でご確認ください。

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ホームページ・Twitter・ニュースレター（メルマガ）でもご案内しています。

○ホームページ <https://www.rekihaku.ac.jp/>

○Twitter @rekihaku

歴博映像フォーラム 15

映画とアイヌ文化

発行日 2021年5月15日

編集・発行 国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地

Tel. 043-486-0123（代）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-14-5



9784909293145